

上野尻埋蔵金伝説

会津で埋蔵金といえば、天正17年(1589)摺上原^{すりあげはら}の合戦で伊達政宗に惨敗した葦名義広が猪苗代湖底に隠したといわれる軍用資金の金の延べ棒が有名ですが、上野尻にも埋蔵金の話があります。

戊辰戦争が始まったころ、上野尻の上層部にある噂が流れたといいます。「お城より大変なものが運び込まれるらしい——」戊辰戦争開始以前、会津藩では鶴ヶ城の西出丸に鑄造所を設け、二分金およびその他の金貨を鑄造していました。その鑄造額は総額120万両(時価約48億円)にも達したといわれ、鑄造は若年寄の山川大蔵^{おおくら ひろし}(明治以降は山川浩に改名)の建議でした。

山川は会津戦争の籠城戦のさなか、すでに官軍に包囲され再入場できない鶴ヶ城に、会津の伝統芸能である彼岸獅子を先頭に舞わせることで入場を果たしたという逸話を持ち、弟は少年期に白虎隊士で後に東京帝国大学総長となった「山川健次郎」、妹は鹿鳴館の花とうたわれた「大山捨松」という名門の家系です。

会津戦争のころ、山川はこの金貨を運び出して鉄砲の調達と他藩への協力依頼に充てようとした。しかし、塩川から船などで上野尻まで運んだところで官軍が迫ってきたという情報が入り、一旦上野尻の諏方神社の床下に埋め、さらに近くの西光寺の墓地裏の山中に埋め直したそうです。この金貨は、戊辰戦争が終わってからその全てが新潟港から秋田港に運ばれ、その後、青森県の斗南藩^{となみ}へ輸送されました。病院の建設や薬の購入などに大いに役立ったと「会津戊辰戦史」に記されています。



▲現在の上野尻の諏方神社



▲西光寺の墓地裏の山林

日増しに寒くなる今日この頃、華やかな紅葉にも雪の便りが届きました。本格的な冬はもうすぐそこです。

昨年、初冠雪の写真を撮り損ねてしまい、「来年こそは」とここで触れましたが、今年はいよいよ撮影することができました(写真11月19日・小杉山自治区にて)。鮮やかな紅葉が雪でうつすらと化粧する、思い描いていたとおりの写真が撮れ大満足です(今年を使う場所がなかったのですが…)。これからさらに冷え込み、年の瀬が迫るころには一面が銀世界となっているのでしょうか。今冬は、できればそんな銀世界も写真に収めてみたいなど思っていたりいなかったり。

外よりこたつが好き 長谷川祐一

編集後記

